

## 響き合うテキスト (四) 幼時体験の光と影

—— 豊子愷「憶児時（幼時の思い出）」と夏目漱石『硝子戸の中』

西 楨 偉

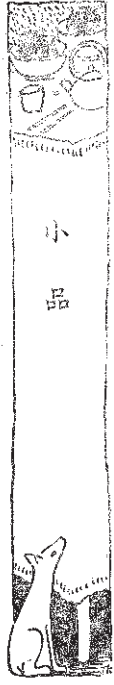
はじめに

「憶児時（幼時の思い出）」は、小品文作家として知られた中国近代の文学者、画家豊子愷（<sup>ほうしがい</sup> 一八九八—一九七五）が「小品」として発表した最初の作品である。それは一九二七年六月、作者が前年より挿絵を手がけていた『小説月報』の「小品」欄に掲載された。同誌は当時最大の新文学結社「文学研究会」の主要雑誌で、それまで主に短編小説を載せていた。この雑誌に初めて設けられた「小品」欄に、豊子愷の小品文が二篇（計五節）のみ掲げられたのである。次号にも同欄が維持され、彼の小品が六篇並べられた。この前後八篇の小品文はいずれも著者初の文集『縁縁堂随筆』（計二〇篇、一九三一）に収録され、豊子愷文学の礎となった。

豊子愷文学と夏目漱石（一八六七—一九一六）との関わりは深く

て長い。よって、「漱石」は豊子愷文学解説の欠かせない視点である。<sup>〔1〕</sup> 初期作品から円熟期、晩年にいたるまで、豊子愷文学に及ぶ漱石の影響は広範にわたる。漱石文学にインパクトを受け、豊子愷文学が成長していったプロセスを両者作品の比較によって仔細に窺うことができる。その全体像をなお把握しきれないているが、豊子愷の初期作品にはとりわけ漱石の影が色濃く現れているのではないかと思われるのだ。

豊子愷の処女作はといえば、それは彼が活動の拠点を上海に移した翌年、立達学会の同人雑誌『一般』（第一巻二号、一九二六年一月）に小説として発表した「法味」であろう。「憶児時」に先立つことわずか八カ月である。この作品は出家した師李叔同（一八八〇—一九四二）との交流を記すことにより、仏教に憧れながらもお近づくにためらいがちな心理を描いたものだが、前半は漱石「初秋



小品

憶兒時

豐子愷

是每天要坐坐。

我回憶起有一件不能忘却的事。

第一件是當那五歲時我剛住在日的手。我祖國是...

價廉物美。我當時的年紀。不但長得很快。而且...

利。這時的年紀。當面與我這時的年紀。故每年...

上。這五歲時。我終於以通行及創舉。這五歲時...

去採薪。我與新離去了。去吃菜。這五歲時...

一。碗菜。我吃了。這五歲時。我就以在產後...

來。這五歲時。我終於。這五歲時。我終於...

我與。這五歲時。我終於。這五歲時。我終於...

這五歲時。我終於。這五歲時。我終於...

到沈。這五歲時。我終於。這五歲時。我終於...

強。這五歲時。我終於。這五歲時。我終於...

與。這五歲時。我終於。這五歲時。我終於...

這五歲時。我終於。這五歲時。我終於...

這五歲時。我終於。這五歲時。我終於...

這五歲時。我終於。這五歲時。我終於...

這五歲時。我終於。這五歲時。我終於...

這五歲時。我終於。這五歲時。我終於...

這五歲時。我終於。這五歲時。我終於...

圖1 豐子愷「憶兒時」が掲載された『小説月報』誌面。第18巻6号、1927年6月10日、商務印書館。同号に「小品」欄が初めて設けられ、カットも豊子愷による。それまでに使用されたことのあるカットだが、味覚表現を特色とする本文の内容にふさわしい。

こうとする姿勢が反映されていよう。実際、数ヶ月後、彼は在家の弟子として李叔同に帰依するのである。

前作「法味」で、「初秋の一日」と『門』の宗助参

禪のくだりを参照したことは、作者が自分自身の仏教体験を漱石のそれに重ねて見ていたことにほかならない。漱石の仏教体験に少なからぬ関心を寄せていた彼は「憶兒時」を創作するにあたり、仏教への強い関心の芽生えを告白するものとも受け取れる漱石の小品を下敷きにしたのではないか、というのが本文の論点のひとつである。

したがって、ここでは、「憶兒時」を『硝子戸の中』第一九—二一節、三一—三二節と比較対照することに

より、豊子愷が漱石に影響を受けた可能性を検討する。同時に、漱石小品の特色や、それを看取してなおも独自性を打ち出そうとする豊子愷文学の魅力に目を向け、両作者の作品を深く味わいたいと考える。

一、「憶兒時」と『硝子戸の中』(一九)

一九二七(昭和二)年六月に発表された「憶兒時」には、独立したエピソードが三節それぞれにひとつ記され、それらは祖母の養蚕、父が蟹を食べることを中心とした一家団欒の情景、そして作者自身

の一日(一九二二)の構成を借用し、全篇に『門』(一九一〇)における宗助参禪のくだりの骨格を用いたと目される。また、「憶兒時」と同号の『小説月報』に載せられた小品「華瞻的日記(華瞻的日記)」は、漱石の「柿」(『永日小品』所収、一九〇九)のストーリーや主要モチーフの配置を反転させて創作した可能性が高い。さて、本論でとりあげようとする「憶兒時」は題目の示すとおり、子どものころの思い出を回想したものである。作者は記憶を喚起しては、そこに見られる殺生の行為を反省する。ここに彼の仏教信仰への決意が込められ、前作「法味」よりも前進した彼の仏教に近づ



図2 豊子愷《弘一大師造象》制作年未詳 『弘一大師全集』第七冊、福建人民出版社、1991年6月による。弘一法師こと李叔同は中国における西洋美術、音楽、演劇受容の草分けとして知られる。彼の出家（1918）後、弟子の豊子愷が美術と音楽の分野でその役割を担った。

と幼友達の魚釣りである。文末において、思い出を振りかえる作者の感想が述べられる構造をとり、それは三節に共通する。その感想とは、蚕、蟹、魚といった生き物を殺生したことへの反省で、作者の仏教思想への傾斜を示しているよう。

連作の体裁は『硝子戸の中』を踏襲するものである。内容が多岐にわたるものの、「子どもの頃の思い出」が『硝子戸の中』には複数節存在し、豊子愷はいち早くそれに注目したことになる。具体的にいえば、里子に出されたみずからの出生（二九）や母親の思い出（三七、三八）を記した三節よりも、「憶児時」は第一九―二一、三一―三二節に近い。特に、第一九節からの三節に描かれた、春の日に聴く御北さんの長唄など隣人や近所の寺の思い出（二九）、母から小遣いをもらい寄席に通ったこと（二〇）、姉たちの芝居見物

（二一）は、漱石にとって心をひかれないではない思い出なのである。「憶児時」の雛型はこの三連作にあると考えられる。豊子愷は仏教への関心というフィルターを通して過去を見つめ、三節に共通の主題を掲げながらも、楽しかりし幼時の思い出を懐かしんでいるように見受けられる。

『硝子戸の中』第一九節で、漱石は幼少時に住んだ家の隣人の思い出をつづり、最後に近所の寺の鉦かねの音が「私の心に悲しくて冷たい或物を叩き込むやうに、小さい私の気分を寒くした」と述べて結んでいる。幼年期の生活環境からとりわけ仏教の感化を受けとめた作品の内容も彷彿としており、ここで両篇を読み比べて見ることにしたい。

「憶児時」は同様の主題と構成をもつ三節からなり、まずその第一節を例にとり、具体的にみてみる。少し長いが、冒頭から三段落引用する。

わたしには忘れられない幼時の思い出が、三つある。  
一つ目は養蚕である。わたしが五、六歳の頃、祖母がまだ健在であった。祖母の性格はおおらかで、彼女は生活を楽しむことをよく知っていた。折々の節句を大切にするのはいうまでもなく、養蚕も毎年盛大に行うのである。実をいうと、

それはわたしが大きくなってからわかったことだが、祖母の養蚕はお金をもうけるためだけではなかった。桑の葉が貴い年になると、よく損をしたものだ。しかし、彼女が暮春のこの行事をこよなく愛し、それで毎年盛大に行つたのである。わたしに嬉しかったのは、まず蚕が床に下りてくるときで、三間の広さのわが家のホールの床全体が蚕に占領される。通行のためまたは餌やりのために、縦横に板がかげられた。蔣五伯は天秤棒をかついで、畑へ葉を摘みに出かけると、わたしは姉たちと一緒に彼について桑の実を食べに行く。蚕が床に下りる頃、桑の実には紫色になり、甘くなるのだ。それは山桃よりずっと美味しい。わたしたちが好きなかだけ食べてから、大きな桑の葉で茶碗の形に作り、実をいっぱい摘んで蔣五伯に連れられ家に帰る。蔣五伯が蚕に餌をやり、わたしは通路の板の間を渡り歩いて楽しんでだ。よく床に転んでは、蚕をたくさん潰したものである。祖母の掛け声で、蔣五伯がとんできて、わたしを抱き起こし、通路で遊んではいけないよという。でも、床にかけられた板は甚盤目の町並みのようで、歩いていて怖さも感じず、たいそうに面白く、それは本当に年一度の得がたい楽しみであった。だから、祖母に叱られようが、わたしは毎日その上を歩いて遊んだ。

蚕をわら族まぶしに上じょうぞく族させる頃、家が静かになり、一同がそれを見守つた。その頃、子どもが騒ぐのも許されず、わたしはひ

どくうつとうしく感じた。しかし、数日後、繭を取り、糸を紡ぐので、またにぎやかな空気に満ち溢れるのである。わが家では毎年牛橋頭に住む七娘娘に糸紡ぎを頼む。繭とり、糸紡ぎ、釜炊きをする人たちのために、蔣五伯は毎日枇杷と柔かなお菓子を買ってくる。今は仕事が大変だが、希望の持てる時期であり、食べる権利があるのだといわんばかりに、みなは遠慮なく果物やお菓子を取って食べる。わたしは仕事をしないにもかかわらず、毎日枇杷とお菓子をたらふく食べ、これもまた楽しみの一つであった。

豊子愷の祖母がなくなったのは、彼が満四歳となった直後、一九〇二（明治三五）年二月だから、その祖母の養蚕はやつと物心がつく三、四歳の頃のものであろう。祖父は早く世を去り、一人息子である豊子愷の父は科挙を受験し、家業にはほとんど携わらなかった。そのため、祖母が一家の長となり、春の行事を主催したと思われる。養蚕は金銭のためというよりも、楽しみのためだったと、豊子愷はふりかえる。彼は祖母のそうした生活の趣味を受け継いだかのように、思い出を懐かしむのだ。家の床一面が蚕と桑の葉に覆われ、その上に板をかけて通路にする様子は子どもの豊子愷を興奮させ、彼は転んでも板を渡り歩いて楽しんだ。祖母や蔣五伯、七娘娘が登場し、そして桑の実や枇杷、お菓子といった味覚の記憶が鮮明

である。にぎやかで希望に満ちた雰囲気の中、転んだ勢いで蚕を潰してしまうアクセシブントも起きた。それが殺生というテーマにつながっていく。文末にかけて、作者は幼時の甘美な思い出を次のように批評する。

今わたしは子どもの頃を回想し、本当に心をひかれてやまないので。祖母、蔣五伯、七娘娘や姉たちはみな童話の中の人物のようである。しかも、わたしから見れば、彼らがあの頃に演じていた芝居の主人公はほかでもなくこのわたしなのだ。それはなんと甘美な思い出だろうか。ただ、芝居の題材について、今考えると、残念のように思う。蚕を飼い、糸を紡ぐのは、生計のためによいこととはいえず、それはもとは何千何万もの生き物を殺戮することにはかならない。蚕を飼うというのは、実は犯人を生かしておくのと同様である。糸を紡ぐというのは、実は彼らを焼き殺しの刑罰に処するも同然ではないだろうか。当時の喜びと幸せは、生霊の虐殺を背景にしていたとは。それがわかっていたなら、わたしはみなと一緒に桑の実や枇杷、お菓子を絶対食べなかつたと思う。最近、『西青散記』を読み、その中に次のような仙人の句を見つけた。「自ら 藕絲くわしを織り 衫子せんし 嫩わかし、辛苦を憐み 春蚕を赦すべし」。人間も蓮根から糸を紡ぐ方法を発明し、蚕の命を助けることができないうら

か。

わたしが七歳の時、祖母が他界した。それより家では蚕を飼わなくなった。間もなく、父も姉も弟も相次ぎなくなり、家運が傾き、わたしの幸せな幼年時代が終った。したがって、わたしはいつまでもこの思い出に心ひかれるとともに、それによつていつまでも罪の意識にさいなまれることにもなつたのである。<sup>(5)</sup>

こうして、作者は養蚕を仏教の殺生観念と結び付け、過去の思い出にある負の面を悔やむ。前述のように、当時彼は仏教に深い関心をもっていたからであろう。ここに引かれた詩句は、作者の主張を強め、効果的でしかも彼の古典文学趣味を表している。そして、全三節とも後半から末尾にかけて、漢詩文を引用しており、同様の構成をとる。この意図的な構成法は注目に値しよう。また、繰り返しになるが、満四歳の時に祖母がなくなつたので、「七歳」(おそらく数え年)とするとところに豊子愷の創作意識が感じられる。彼の小品文は決して事実そのままではなく、創作された作品なのだ。では、『硝子戸の中』第一九節の内容を見ながら、「憶児時」との関わりを探ってみよう。

馬場下にある旧宅を回想したのが『硝子戸の中』第一九節である。思い出は隣人にまつわるもので、そこに登場するのは小倉屋という酒屋、やっちゃば(青物市場)、豆腐屋や西閑寺である。小倉屋に

ついで、漱石はこう記す。

(前略)それから坂を下り切った所に、間口の広い小倉屋といふ酒屋もあつた。尤も此方は倉造りではなかつたけれども、堀部安兵衛が高田の馬場で敵を打つ時に、此処へ立ち寄つて、枺酒を飲んで行つたといふ履歴のある家柄であつた。私はその話を小供の時分から覚えてゐたが、ついで其所に仕舞つてあるといふ噂の安兵衛が口を着けた枺を見たことがなかつた。其代り娘の御北さんの長唄は何度となく聞いた。私は小供だから上手だか下手だか丸で解らなかつたけれども、私の宅の玄関から表へ出る敷石の上に立つて、通りへでも行かうとすると、御北さんの声が其所から能く聞こえるのである。春の日の午過ぎなどに、私はよく恍惚とした魂を、麗かな光に包みながら、御北さんの御浚ひを聴くでもなく聴かぬでもなく、ぼんやり私の家の土蔵の白壁に身を靠たせて、佇立んでゐた事がある。其御蔭で私はとうとう「旅の衣は篠懸の」などといふ文句を何時の間にか覚えてしまつた。

漱石の思い出も長い段落で述べられる。この節は全部で四つの段落しか設けられていない。豊子愷の「憶児時」初出の第二節は五段落構成でほぼ同じといえる。ちなみに第一節は七段落、第三節は九

段落で、『硝子戸の中』よりやや長いが、長い段落にも平叙文で思い出を一人称作者視点で細やかに語るといふ特色は共通する。また、ともに掛け声など直接話法による短い挿入句をちりばめ、それが平叙文の単調さを破る役割を果たす。穏やかな調子で思い出が次から次へ湧き出るとくに語られていく。そんな文の流れも類似する。

内容はどうかだろうか。小倉屋の思い出は前半に堀部安兵衛(二六七〇―一七〇三)が立ち寄つたという、店のよく知られた歴史に触れ、後半はその娘の長唄を聴いた当時の自分の幸福感が書かれる。後半の情景は作者にとつて原風景といふべきもので、豊子愷がいうところの「心をひかれずにはいられない」ものであり、漱石がいうところの「過去を誘ひ出す懐かしい響」(『硝子戸の中』二三)を与えてくれるものにちがいない。ところが、前半も作者の心の奥にすくつていた記憶であり、子どもながら義土堀部が口をつけた枺に興味をもつていたのである。義士は世代を超えて人々の記憶に残り、その行為は賞賛されたであろうが、この挿話には死の影が付きまとう。敵討ちは生死の戦いであり、その物語は多感な少年に衝撃を与えたであろう。御北さんの長唄には生の歓喜があるとすれば、堀部のエピソードは死の影を宿している。

この一段は聴覚を中心に、視覚、触覚も交えた表現に特色があるが、それについてはまた触れるとして、青物市場の間屋仙太郎を描

いたくだりも見ることにはしよう。

(前略) 少し八幡坂の方へ寄った所には、広い土間を屋根の下に囲ひ込んだや、つちや場もあつた。私の家のものは其所の主人を、問屋の仙太郎さんと呼んでゐた。仙太郎さんは何でも私の父と極遠い親類つゞきになつてゐるんだとか聞いたが、交際からいふと、丸で疎闊であつた。往來で行き会ふ時だけ、「好い御天気で」などと声を掛ける位の間柄に過ぎなかつたらしく思はれる。此仙太郎さんの一人娘が講釈師の貞水と好い仲になつて、死ぬの生きるのといふ騒ぎのあつた事も、人間に聞いて覚えてはゐるが、纏まつた記憶は今頭の何処にも残つてゐない。小供の私には、それよりか仙太郎さんが高い台の上に腰を掛けて、矢立と帳面を持つた儘、「いーやつちや若干」と威勢の好い声で下にある大勢の顔を見渡す光景の方が余程面白かつた。下からは又二十本も三十本もの手を一度に挙げて、みんな仙太郎さんの方を向きながら、ろんじだのがれんだのといふ符徴を、罵るやうに呼び上げるうちに、薑や茄子や唐茄子の籠が、夫等の節太の手で、どしく何処へ運び去られるのを見てゐるのも勇ましかつた。

ここでも、描写は前半と後半に分けられよう。前半には夏目の家

と仙太郎との関係やその娘の悲恋が語られ、後半には好ましく描かれた、力強く生きる庶民の姿がある。漱石少年は生死をかけた恋の行方よりも、庶民の生き生きとした生活風景にひきつけられた。引用の後半から青物市場の活気が伝わってくる。この描写に「手」がモチーフとして、二度繰り返されたことに注目したい。仙太郎の掛け声に「二十本も三十本の手」が一斉に挙がり、そして「節太の手」によって籠が運ばれるところである。これらの「手」の描写は視覚的で、一斉に挙がる多くの「手」は市場全体の雰囲気や伝え、さらにクローズアップされた「節太」な「手」は働く庶民のたくましさや映し出す。先に引いた「憶児時」第一節冒頭部第三段落を顧みれば、その描写はこのくだりを思わせる。糸紡ぎの工程に入り、みな希望を胸に働き、遠慮なくお菓子を食べる様子は青物市場同様の生活感と活力を感じさせる。

さらに、「憶児時」第一節、第二節で、豊子愷も「手」を描いている。第一節で、祖母の養蚕を手伝うのは蔣五伯と七娘嬢である。彼らは、「硝子戸の中」の仙太郎のように、その働く姿を作者の目に焼き付けた。作者は七娘嬢の「手」に目を向ける箇所を引く。

七娘嬢が糸紡ぎの手を休め、水タバコを吸いながら、左手の小指をわたしに見せた。糸を紡ぐ時、絶対糸車の後に行つてはいけないよとわたしにいった。子どもの頃糸車の車軸に轆かれ、

彼女の小指は半分ほど短くなっていた。「子どもは糸車の後ろで遊んではいけないよ。わたしの横に坐って、枇杷や柔らかいお菓子を食べなさい。それに、糸紡ぎでできたさなぎはお母さんに炒めてもらいなさい。とてもうまいから」ともいった。しかし、わたしは決してさなぎを食べなかった。それは、父や姉たちも食べようとしなかったからだと思う。<sup>(8)</sup>

このように、豊子愷も「手」に注目したのである。糸車の車軸に小指を切断された七娘娘は子どもの頃に、働く親の目が届かないところで遊んでいたのだろう。そんな不慮の事故を聞かされ、気をつけるようにといわれた豊子愷は、七娘娘の手を記憶にとどめたと思われる。さらに、第二節で豊子愷は母親の「手」を描写する。一家揃って食卓を囲んで蟹を食べる際、不器用な母がよく蟹の刺にさされ、血がにじむことがあるという。痛む「手」は七娘娘の「手」に呼応するものといえよう。彼は「手」で「痛み」を表すのだ。

「憶児時」の主人公は、幼時ののどかな空気なかで、幸福感を味わうとともに、生の痛みや不幸をも見せ付けられたのである。これに対して、漱石の記憶も実に生の光と影の両面を掬い取っているといえる。小倉屋の娘御北さんや問屋の仙太郎は明るい面を代表し、義士堀部の敵討ちや仙太郎の娘の悲恋は影の部分といえよう。このように、「両作者はともに生の喜びを感じさせる情景の中に、痛みや

不幸を潜ませている。彼らは、そうした過去に何を語らせようとしたのだろうか。まず、『硝子戸の中』第一九節の末尾の段をその途中から最後まで引いておく。

(前略) 其豆腐屋について曲ると半町程先に西閑寺といふ寺の門が小高く見えた。赤く塗られた門の後は、深い竹藪で一面に掩はれてゐるので、中に何んなものがあるか通りからは全く見えなかつたが、其奥でする朝晩の御勤の鉦の音は、今でも私の耳に残つてゐる。ことに霧の多い秋から木枯の吹く冬へ掛けて、カン／＼と鳴る西閑寺の鉦の音は、何時でも私の心に悲しく冷たい或物を叩き込むやうに、小さい私の気分を寒くした。<sup>(9)</sup>

最後に作者は、「或物を叩き込む」という表現を用い、鉦の音の威力を表す。秋から冬にかけて、万物凋落の季節に、少年はその全身で鉦の甲高い響きを受けとめたのであろう。しかし、鉦の音よりもむしろ、生の隣に存在する死の影が彼の心を強く揺さぶり、寒くしたのではないだろうか。作者が心に受け止めた「悲しくて冷たい或物」を「仏教的な世界観」だと解すれば、感覚的で含蓄のあるこのことばを限定しすぎるきらいがあるだろう。しかし、少なくとも仏教の感化を受けたと解釈することは可能ではないだろうか。

このように、「憶児時」は構成と内容ともに、『硝子戸の中』(一



九) とほぼ重なるといつてよい。「初秋の一日」や『門』に注目した豊子愷は、『硝子戸の中』(一九)に興味を惹かれたことは頷ける。なぜなら、この三篇はいずれも漱石と仏教の関わりを示すものだからである。

## 二、幼友達「王団団」と「喜いちちゃん」

「憶児時」全三節はひとしく幼時に行った殺生に対する罪悪感を表すが、第三節にはほかの感情の表出も見られる。幼友達王団団おうけんけんに釣りを教わり、それは餌となる米虫、ハエ、ミミズを虐殺することにつながり、魚を謀殺する行為だとして、作者は前の二節同様の結論を最後に置いた。しかし、忘れられない思い出に、彼は成長する自分の別の側面を見出している。

それからというもの、わたしは釣りが好きになった。王団団がいなくても、一人で釣りに出かけた。そして、ミミズを掘って、魚を釣るといふやり方も覚えた。釣ってきた魚は夕食のおかずとして食べきれないので、店の店員たちや猫にも分けることができた。そのごろ、わたしが釣りに熱中したのは、遊戯欲とともに、功利心も含まれていたような気がする。三、四年の間、夏になるとわたしはそうして釣りに熱を上げ、家の食費を随分節約した。<sup>(10)</sup>

つまり、釣りは殺生というだけでなく、幼い心に「功利」への興味を植えたのだ。父の死後、ますます不如意となる家計を助ける少年の姿はけなげといえるが、彼自身は利益追求について、どう考えたのだろうか。「憶児時」第一節で、彼は祖母の養蚕における非功利性に賞賛の口調で言及し、またやや遅れて発表された「姓」で、彼は金融業者を風刺し、営利行為をよしとはしなかった。よって、作者は王団団との思い出に、功利心の芽生えも見出し、殺生ほどではないにせよ、彼はそれを好ましいものとはしなかった。

『硝子戸の中』第三一、三二節でも、幼友達の喜いちちゃんが登場し、作者は彼との交友を回想する。喜いちちゃんが家から持ち出した『南畝莠言』なんぼゆうげんを漱石は値切って買い取るが、翌日家で叱られた喜いちちゃんは取り戻しに来る。そこで、漱石がその折の感情を次のように分析してみせる。

(前略) 私は今迄安く買ひ得たといふ満足の裏に、ぼんやり潜んでゐた不快、——不善の行為から起る不快——を判然自覚し始めた。さうして一方では狡猾ずるい私を怒ると共に、一方では二十五銭で売つた先方を怒つた。何うして此二つの怒りを同時に和らげたものだらう。私は苦い顔をしてしばらく黙つてゐた。<sup>(11)</sup>

漱石は本を取り戻そうとする喜いちゃんに怒りをぶつけた。それは自分のずるさと、五十銭と掛け値をしておいて、「二十五銭で売った先方」の狡猾さに対するものでもあった。こうして、幼心に生まれた損得勘定の心理をみずから暴露し、それは反省の弁と受け取ることができよう。

『南畝考言』はすでに買ったのだから、そちらが困るなら自分の所有となったそれを差し上げてもいいが、払った二十五銭は受け取らないという漱石の主張が通り、この一件が落着いた。利得心による不善を反省する漱石と、釣りによって遊戯欲のほかに功利心が培われたとする豊子愷の表現には一脈相通じるところがあるように思われる。

それだけでなく、彼らのストーリー展開にも類似点が見受けられるのだ。それぞれの冒頭部分を引き、見比べることにしよう。文中の傍線と順番を示す記号は引用者による。

忘れられない三つ目の思い出は隣の豆腐屋の子王団団との交遊である。その交遊は釣りを中心とする。

十二、三歳の時、隣の豆腐屋の子王団団は、わたしの幼友達の中の大将であった。一人っ子で、その父がなくなつてから生まれたのだと彼はいった。彼の母親、祖母そして彼が「おじさん」と呼ぶ職人の鐘さんは、みんな彼を可愛がった。彼はおも

ちゃをたくさん持つており、お小遣いも人より多くもらつていた。それも、小さい仲間の中で英雄となるための条件であつた。ほかの子どもたちは、いつの間にか彼を大将とし、彼に付き従つた。①しかし、彼はわたしに対して、一目置いていた。当時わたしは母親にそれはなぜかと聞いた。母は「お前の父が彼の家の鐘さんの世話をしたことがあるから、それで鐘さんも彼に君と仲良くするようにといつたからでしょう」と、わたしにいつた。②それはどういふことか、子どものわたしにはわからなかつた。③後で、「王団団はその父の種ではない」や「王家の親族は鐘さんをとちめようとし、慶珍お嬢さん（つまり王の母）を追い払うそうだ」とか、また「鐘さんは豊家に隠れている」とか大人たちが話すのを聞いたことがある。また、王団団はおもちゃの弓矢でわたしの脚に当たることがある。わたしが泣いたら、彼の祖母は「ばかな真似をおしてないよ、あの子は旦那のお子さんで、うちは旦那のお世話になつていふのよ」と彼を叱つた。④それはどういふことか、わたしにはわからなかつた。ただ、これらの会話から判断して、彼の家が困難な場面に遭遇したとき、わたしの父が彼らを助けたことがあるようだ。それで、彼は家でわたしに仲良くするようといわれたのだらう。⑤

私がまだ小学校に行つてゐた時分に、喜いちちゃんといふ仲の  
 好い友達があつた。喜いちちゃんは当時中町の叔父さんの宅にゐ  
 たので、さう道程の近くない私の所からは、毎日会ひに行く事  
 が出来悪かつた。私は重に自分の方から出掛けしないで、喜いち  
 やんの来るのを宅で待つてゐた。⑤喜いちちゃんはいくら私が行  
 かないでも、屹度向ふから来るに極つてゐた。さうして其来る  
 所は、私の家の長屋を借りて、紙や筆を売る松さんの許であつ  
 た。

喜いちちゃんには父母がない様だつたが、小供の私には、それ  
 が一向不思議とも思はれなかつた。恐らく訊いて見た事もなかつ  
 たらう。⑥従つて喜いちちゃんが何故松さんの所へ来るのか、  
 其訳さへも知らずにゐた。⑦是はずつと後で聞いた話であるが、  
 此喜いちちゃんの御父さんといふのは、昔し銀座の役人か何かを  
 してゐた時、賈金を造つたとかいふ嫌疑を受けて、入牢した儘  
 死んでしまつたのだといふ。それであとに取り残された細君が、  
 喜いちちゃんを先夫の家へ置いたなり、松さんの所へ再縁したの  
 だから、喜いちちゃんが時々生の母に会ひに来るのは当り前の話  
 であつた。

⑧何にも知らない私は、此事情を聞いた時ですら、別段変な感  
 じも起さなかつた位だから、喜いちちゃんと巫山戯廻つて遊ぶ頃  
 に、彼の境遇などを考へた事はたゞの一度もなかつた。

やや長い引用となつたが、両作者ともに幼友達の身の上をかなり  
 詳細に紹介することから始めている。彼らの幼友達の身の上に共通  
 点があるのは偶然だとしても、彼らの文章表現が似通うのは偶然と  
 はいえないだろう。まず、王団圀と喜いちちゃんはともに複雑な家庭  
 環境のなかにある。王団圀はその父がなくなつてからの子だといふ  
 が、実際は豆腐屋で働く職人鐘さんの子だと噂される。男女の自由  
 な恋愛が認められない時代ゆえに、王家の親族は鐘さんを懲らしめ  
 ようとしたが、鐘さんは豊子愷の家に隠れ、難を逃れた。それで、  
 王団圀の家では豊家に恩義を感じ、二人の少年も親しくなつた。一  
 方の喜いちちゃんも早くに父をなくし、その母は彼を先夫の家に残し  
 て、漱石の家の長屋に住む松さんと再婚した。喜いちちゃんが松さん  
 のところに来るのは母に会うためであつた。

そんな家庭事情を正確に把握するには、豊子愷も漱石もたしかに  
 幼かつた。彼らがそれを理解するのに時間がかかり、そのことを表  
 す叙述の方法に着目してみよう。「幼友達の中の大将」として紹介  
 された王団圀は、豊子愷少年に「一目置いていた」。それはやや不  
 自然な待遇で、豊子愷が読書人の家の子だからではない。この不平  
 等な交友に疑問を感じ、少年は母親に訊ねてみたが、得られた答え  
 は曖昧で少年にはわからなかつた。傍線⑨に至る文脈を⑩までの漱  
 石の文と対比してみると、どうであろうか。喜いちちゃんと漱石も平

等とはいえない交友関係にあった。相当の距離にもかかわらず喜ちゃんがいとも漱石のところをやってきたのだ。それはなぜか、漱石の場合は「恐らく訊いて見た事もなかつたらう」という。それわからなかったのは無理もない。豊子愷は母親に訊ねたという違いはあるが、これまでの文脈は非常に近いといえよう。

次に傍線③から④までを、⑧から⑨に至るまでの文脈と照らし合わせてみよう。傍線③と④によって掻き立てられた読者の好奇心が、⑤または⑥によって満たされることになる。友人の家庭事情を説明する⑦と⑧はいずれも伝聞による情報だが、それが彼らの少年時代の不平等な交友が成り立つ背景であった。伝聞によって伝えられたのは、その秘すべき性格と重大さを物語っている。社会のモラルに触れるゆえ、実に深刻なのだが、そのように受けとめるに彼らはまだ幼すぎたようだ。それで彼らは同じように、なおも理解できないという反応を示したのである。このように、豊子愷と漱石は幼時代の交友を述べるにあたり、ほぼ同じような屈折した流れを持つ文を冒頭に置いたといえる。

では、この部分がそれぞれのストーリーで果たす役割はどうだろうか。家庭の騒動が王団団の性格にも影響を与えたと思われるが、「憶児時」ではそちらへの展開は見られない。とはいえ、このくだりにより、彼らが親しくなる背景が示され、後の王団団の行動の動機付けが与えられた。たとえば、一緒に釣った魚を全部豊子愷の家

に持っていった王団団は、子どもながら豊家の恩義に報いるつもりだったにちがいない。一方、喜ちゃんの場合、その父が「贖金を造つたとかいふ嫌疑を受けて、入牢した儘死んでしまった」ことが、後の本をめぐる金銭トラブルの伏線とみなすことも可能であろう。また、喜ちゃんの置かれた境遇が、彼の言動を考えるのにも重要な情報と思われる。<sup>14</sup>したがって、王団団の身の上を述べるのに、豊子愷は「硝子戸の中」第三一節を参照したと考えられるが、そうして書かれた文は異なる文脈で有機的な役割を担っている。

ところが、王団団の家庭環境を反映するこの一段は、後に大幅に書き直された。<sup>15</sup>それはまず幼友達王団団及びその家族のプライバシーに関わる事柄が含まれるからだと考えられる。「憶児時」が発表された当時、豊子愷は満二八歳で、その友人も三〇歳ぐらいだったのではないか。差し障りがあったはずだ。書き直された後の文章には、「彼の家族がわが家に対して隣人以上の情誼を抱いているように」、また「彼の家が困難に遭ったところを、わたしの父が助けてあげたらしい」といった、両家の親交を伝えることばは見られるが、友人の出自に関する具体的な表現はすべて削除された。それは当然の措置であり、それに魚釣りの残虐性を指摘するのに、友人の家庭事情を詳述する必要はあまりなかったといえる。にもかかわらず、友人の出自と自分との関係を詳述したのは、漱石の文章作法に引きずられたからだと考えられるかもしれない。



図3 豊子愷画、李叔同書《蚕の刑具（蚕の刑具）》 豊子愷画・弘一法師書『護生画集』上海開明書店、1929年2月初版、同年7月再版。絵画は「憶児時」第一節後半の表現を踏まえており、豊子愷の絵画は文学と深い関わりをもつ。

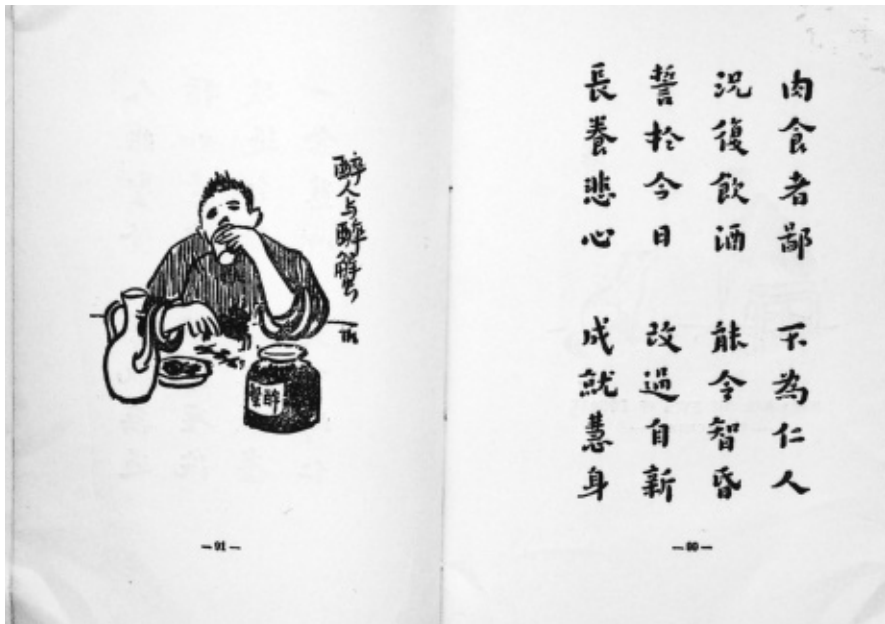


図4 豊子愷画、李叔同書《醉人与醉蟹（酔った人と蟹の酒漬け）》 前掲『護生画集』第一集。蟹を食べるという題材は、「憶児時」第二節と関連があろう。「憶児時」発表後、同年秋李叔同は豊子愷の家に長期滞在し、その折に『護生画集』制作の計画が話し合われた。豊子愷の画に李叔同が詩を付し、詩画対照形式の画集が1929年に生まれた。「憶児時」などで発されたメッセージに李叔同が応えたのだ。以後、師弟の絆を示す同画集が第六集まで刊行された。

### 三、感覚の交響

「憶児時」初出形は三節とも同じ構造をもつ。すなわち、細部にわたって幼年期の記憶を呼び起こしてから、古典詩文を引用し、最後に甘美な記憶に潜む殺生の行為を反省する。三節ともに古詩文引用の位置が同じで、内容がほぼ重なる結末の短い段落の表現も大同小異である。

作者はなぜこのような手法をとったのだろうか。漱石は『硝子戸の中』第二〇節に「半鐘と並んで高き冬木哉」、第二三節に「影参差松三本の月夜かな」とそれぞれ篇末近くにみずからの句を置いた。前者には親友正岡子規の思い出があり、後者には昔日の家の面影が宿る。これらの句の引用により、時間の経過から生まれる滄桑の感じがいつそう強く感じられる。一方、豊子愷が引く詩文は彼自身の作品ではなく、もたらす効果も漱石とは異なる。彼は殺生への懺悔という主旨を引き出すために、古詩文を再評価したうえで用いたのだ。したがって、幼時の思い出を記しながらも、豊子愷と漱石は同じ方向を目指したわけではない。それというのも、『硝子戸の中』は作者がなくなる前年の作品で、筆は過去と現在を自由に行き来するが、過去の思い出に主眼があるといえよう。ところが、豊子愷はこれから文壇に躍り出ようとする矢先であり、ここで比較を試みる彼らの文に相違があるのはむしろ当然であろう。

豊子愷は幼時の思い出よりも、そのころの殺生行為を悔い、仏教への憧れを吐露しているのだ。このメッセージは同じように締めくくられる三節の末尾において一目瞭然である。では、このメッセージは誰に向けられたものだろうか。文中には特定の対象は示されていない。しかし、「憶児時」に先立って発表された「法味」（一九二六）は李叔同との交遊を通して、仏教に心ひかれながらも信仰の生活に踏み出せず、逡巡する胸中を記した作品であるのみでなく、本篇のタイトル「憶児時」にも李叔同への思いが込められているのだと思われるゆえ、李叔同へのメッセージでもあるとみなしうるのではないか。なぜなら李には同題の歌（一九一五）があり、その内容も豊子愷作品と重なるところがある。李によるその歌詞を示しておく。

春去秋来

春去り 秋来たりて、

歲月如流

歲月 流るるが如く、

游子傷漂泊

游子 漂泊を傷む。

回憶児時 家居嬉戯

児時を回憶すれば、家居の嬉戯、

光景宛如昨

光景 宛も昨の如し。

茅屋三椽 老梅一樹

茅屋 三椽 老梅 一樹、

樹底迷藏捉

樹底 迷藏を捉えたり。

高枝啼鳥

高枝の啼鳥、

小川游魚

小川の游魚、

曾て 閑情を把りて托せり。

児時歎楽

児時の歎楽、

斯楽不可作

斯の楽 作すべからず。

児時歎楽

児時の歎楽、

斯楽不可作

斯の楽 作すべからず。<sup>(16)</sup>

故郷を後にして久しい旅人が、ふと子どものころの情景を懐かしくまぶたに浮かべ、しばし感傷に浸るといふ歌詞である。豊子愷は「法味」でもこの歌に触れ、さらにみずから編集した『中文名歌五十曲』(二九二八)にもこの歌を収めている。彼の小品文タイトルがこの歌にちなむことは間違いないだろう。春が去り、秋がめぐってくる歌われるが、豊子愷は第一節に春、第二節に秋、第三節は夏に熱中した魚釣りを描いては、冬の詩句を複数引用した。つまり、彼も季節の移りかわりを意識し、四季を作品に盛り込んでいる。お祭りにも似た雰囲気の中、養蚕の季節を愉しんだ第一節は、豊子愷にとつての「家居の嬉戯」であろうし、王団団と魚釣りをしたことから功利心が芽生えたとはいえ、それは幼友達との遊戯でもあろう。しかも、魚釣りや解釈することはできないものの、李叔同の歌では「小川の游魚」に「閑情(静かな心)」を托すのであり、「魚」というモチーフは共通する。

もつとも注目すべきは、歌末尾のリフレインである。歌の形式か

らすれば、なんら不思議はないのだが、このリフレインの形を豊子愷は小品文に用いたのではなかったか。つまり、三節とも同じ構成をもち、そのうえ類似する末尾を置いたのは、歌のリフレインの手法を模したのだと考えられる。

こうして、小品に詩的で、音楽的な効果が得られたが、豊子愷が参照したと思われる『硝子戸の中』ではどうだろうか。先に引いた第一九節は近所の娘「御北さん」の長唄と「西閑寺の鉦の音」に関する描写が詳細にわたっており、「聴覚」表現に特色が認められる。この節において「聴覚」のほかに、「視覚」「嗅覚」表現も見られることは、すでに岡三郎氏によって指摘されている。<sup>(17)</sup> こうした多様な感覚表現は、実は続く二節にも見出される。幼時の思い出をつづるこの前後三節は内容的にも、表現のうえでも呼応しあうところがある。

第二〇節では寄席に講釈を聴きに行ったことや、その途中の風景などが回想される。「席亭の主人」の「赤い筋の入った印(しるし)絆纏」や「大空が曇つたやうに始終薄暗かつた」「一筋道」など、視覚に訴える表現のほか、末尾近くにみえる「縄暖簾の隙間からあたたかさうな煮(に)の香(かほ)が烟(けむ)と共に往来へ流れ出して」というくだりには「触觉」「味覚」「嗅覚」「視覚」のみごとな融合が行われている。さらに、火事を知らせる半鐘についての句「半鐘と並んで高き冬木哉」が引かれて、文が結ばれるが、この句には視覚イメージのほか、

「半鐘」ということばに付随し、「聴覚」的效果も伴ってしよう。

続く第二一節は作者が兄から聞いた、姉たちの芝居見物の思い出である。作者自身の体験ではないためか、五感による表現は多くない。しかし、兄の記憶として、「米を舂く音を始終聞いた」という表現が文末近くに置かれたことに注目したい。それは昔日の家の繁栄を示すものであるうえ、前の二節末尾に配置された聴覚表現に応えるものでもあろう。したがって、『硝子戸の中』第一九、二〇、二二節では共通して文末に聴覚表現をもつ。この特徴は、音楽的要素の積極的導入という点で、リフレイン形式を用いた「憶見時」と一脈通じるのだ。

内容には相違があるわけだが、「憶見時」における感覚表現全般に目を向けると、どうであろうか。「憶見時」三節の間で響きあうのは「味覚」表現といえよう。第一節では桑畑で紫色に熟した桑の実や、労働者に供される枇杷や柔らかなお菓子、第二節では蟹、第三節では魚を食べたことが回想される。とりわけ、第二節は蟹を食べることを中心に書かれ、第一節でも食べ物のことが繰り返し言及されたことから、味覚表現の重視は意図的に行われたことがわかる。そのほか、「視覚」「触覚」表現も散見され、なかでも第二節において作者がその父親と囲った食卓の様子や中秋月見の宴は絵画的に映し出された。

このように、豊子愷も「憶見時」において、多様な感覚による表

現を試みていたように思われる。三節に共通する感覚表現がみられることも、『硝子戸の中』第一九、二〇、二二節の手法に近い。

したがって、豊子愷は漱石の文章技法を把握したうえで、少しずらしてその技術をわがものとしたのではないかと考えられる。『硝子戸の中』のこの辺りを読む彼は、漱石『文学論』冒頭部分をも参考にした可能性があろう。というのは、感覚表現が「文学的内容」となることを漱石はそこで説いているのである。そこで彼は、「聴覚」が「美的快感の重要な地位にあることは、音楽なる特殊の技術が独立して存在するによりても知りうべし（中略）時には単に音の感覚のみを以て立派なる文学を構成し得べしと信ずることあり」と述べ、また諸感覚の融合による例を挙げ、「五彩の陸離たる人目を眩し、吾人の心神を恍惚たらしむ」<sup>(19)</sup>効果があると指摘する。よって、漱石の場合、『硝子戸の中』第一九―二二節において感覚表現を多様に展開してみせたのは、そうした方法論の実践でもあった。豊子愷にあつては、彼が文学の道に邁進しようとするときに、作品とともに漱石の文学理論も同時に参照できたわけで、彼が『文学論』に触手を伸ばしたとしてもなら不思議はないだろう。

#### 最後に

三節からなる連作小品「憶見時」は『硝子戸の中』第一九、二〇、二一、三一及び三二節から、テーマや構成法、表現技巧を借用した



と思われる。そうして、作者豊子愷は執筆前、『硝子戸の中』全体を読み込んでいたのではないかと推測される。

一方、「法味」の創作により、豊子愷が漱石の仏教体験に注目したことが知られるわけだが、その関心が「憶児時」にも一貫して見受けられる。さらに、「憶児時」は李叔同を意識しており、師弟関係がテーマとして織り込まれたのだ。それは前作「法味」に継承したものであるとともに、漱石「初秋の一日」に通底するものでもある。豊子愷は漱石作品にみえる師弟関係というテーマにも着眼していたと思われる。

最後に、豊子愷文学における「憶児時」の位置を考えてみたい。

まず、前述のように「憶児時」は豊子愷の小品随筆の第一作である。とはいえ、『小説月報』という五四以降、最大の新文学結社である文学研究会の主要雑誌にそれを掲載したとき、彼の名はすでに同誌の読者に知られていた。というのは、彼は一九二六年一月より、同誌の扉絵と本文カットを担当し、みずからの漫画を載せ、または漫画や音楽に関するエッセイを発表することもあった。<sup>(20)</sup>彼の漫画を世に送り出し、彼の画才を認めていた主編の鄭振鐸<sup>(21)</sup>(二八九八—一九五八)は、彼の文壇への登場にも門戸を開いたのである。

次に、小説「法味」の発表からやや間を置いて創作された「憶児時」は一連の小品のうちの一作目でもある。『小説月報』次号掲載の六篇をも視野に入れれば、計八篇のうち子どもの頃の思い出を中

心とし、またはそれを織り交ぜたものは三篇(「憶児時」「楼板」  
「姓」)も含まれる。ほかの五篇も作者の子どもを題材としたり、作者の留学体験を書いたりしたものであることを考えれば、全体に一つの方向が見えてくる。すなわち、それらはすべて、作者自身の小宇宙——過去または現在、親類、友人や子どもたちなど——における出来事が素材だといえる。

こうした作品創作の方向性がいかに形成されたのだろうか。さまざまな要因が考えられるなかで、漱石『硝子戸の中』の影響も無視し得ないものと思われる。すでに見たように、「憶児時」は『硝子戸の中』と関わりがあり、また八篇のうちの「姓」も同じく『硝子戸の中』に触発されたものと考えられ、『硝子戸の中』は豊子愷の小品文にとつて格好の材源であった。

その後の豊子愷文学を見渡した上で、「憶児時」はどのような位置づけられるだろうか。まず、それは仏教文学ともいえるもので、豊子愷はそうした作品をさらに書き続け、それが彼の特色ともなっていく。やがて、彼は画家としても生霊の愛護を訴える『護生画集』第一集を一九二九年に上梓する。仏教をテーマとする文学や絵画は彼のライフワークとなる。そうした作品のうちに、昆虫、魚、小動物がよく描かれるようになるが、それは「憶児時」の題材を継承し発展させていったものといえよう。つまり、「憶児時」で作者は仏教を肯定的にとらえ、その後もみずからの思想や作品にそれを

取り入れていった。しかし、『硝子戸の中』では仏教は心ひかれるものとして描かれておらず、作者は幼時の仏教体験をむしろ否定的にとらえている。この相違について、両作者と仏教の関わり方も含めて、なお熟考する必要があるだろう。

また、「憶児時」に登場する祖母、両親、幼友達は、彼の晩年の随筆『縁縁堂続筆』（創作は一九七二）に再び姿を現すことになるが、注目してよいだろう。そこでは、父の思い出として蟹を食べたことや、王団団と釣りをしたことも触れられるが、作品の主眼はもはや殺生の罪悪感を表すことに置かれていない。彼は、才能を発揮できず早く他界した父に同情を寄せ、不幸な生い立ちを背負った幼友達を思いやると同時に、恋愛の自由を認めない社会をも糾弾する。それらのテーマは「憶児時」の行間に見え隠れしていたものともいえる。<sup>(2)</sup>晩年になって、創作の原点に回帰する豊子愷文学、作者はそれを意識して行ったのだが、そこにも漱石の影が映し出されているのだろうか。

## 注

- (1) 豊子愷と夏目漱石の関連に触れた陳星、楊曉文の先行論については、拙論「響き合うテキスト——豊子愷と漱石、ハーン」『日本研究』国際日本文化研究センター紀要、第三三集、二〇〇六年十月

で言及した。そのほか、王成「豊子愷与『旅宿』的翻译」『中華読書報』二〇〇一年一月三日もあり、豊子愷の小品に与える漱石の影響を指摘するが、詳細な比較検討はなされていない。『日本研究』掲載の拙論のほか、筆者には「桃源の理髮店——豊子愷と『草枕』」『文学部論叢』第九八号、熊本大学文学部発行、二〇〇八年三月や「門前の彷徨——試論豊子愷「法味」（一九二六）与夏目漱石「初秋的一日」（一九二二）」「門」（一九一〇）」「永恒的风景——第二届弘一大師研究国際学術会議論文集」中国文化芸術出版社、二〇〇七年一二月などの拙稿がある。

(2) 前掲拙論「門前の彷徨——試論豊子愷「法味」（一九二六）与夏目漱石「初秋的一日」（一九二二）」「門」（一九一〇）」を参照。同稿の日本語版は『漱石と世界文学』田中雄次ほか編、思文閣出版二〇〇九年三月に収録される予定である。

(3) 拙稿「心の隔たり——豊子愷「華瞻的日記」と夏目漱石「柿」日本比較文学会第七〇回全国大会（二〇〇八年六月二二日、大妻女子大学多摩キャンパス）における口頭発表。発表稿は日本比較文学会編『比較文学』第五一卷、二〇〇八年度、二〇〇九年三月発行に掲載予定。同稿の中文版は『川本皓嗣古稀記念論集』中華書局、近刊に収められる予定である。

(4) 豊子愷「憶児時」一、『小説月報』第一八巻六号、一九二七年六月一〇日、「小品」欄、一頁。原文は中文、引用は拙訳を用いた。

(5) 前掲『小説月報』二頁。

(6) 夏目漱石『硝子戸の中』（一九）、初出は『東京朝日新聞』大正四年二月一日、大阪版も同日掲載、ここでは『漱石全集』第二二巻、

岩波書店、一九九四年二月により、五六二―五六三頁、引用に際してルビは適宜省いた。

- (7) 前掲書、五六三―五六四頁  
 (8) 前掲『小説月報』一頁。  
 (9) 前掲『漱石全集』、五六四頁  
 (10) 前掲『小説月報』四頁。  
 (11) 前掲『漱石全集』、五九六頁。  
 (12) 前掲『小説月報』三頁。  
 (13) 夏目漱石『硝子戸の中』(三二)、初出は『東京朝日新聞』大正四年二月一五日、大阪版は二月一四日に掲載、ここでは前掲『漱石全集』により、五九二―五九三頁。  
 (14) 岡三郎氏は『夏目漱石研究』第二卷、国文社、一九八六年二月で、『硝子戸の中』第三一、三二節における「喜いちゃん」の位置づけと二節にわたる作品の主題について、次のような見解を述べている。「人間関係という視点から二つの極があり、二人の人間が理解しあえるという系列の一方の極に〈O〉という高等学校の友人や〈大塚楠緒さん〉が描かれ、逆に理解しあえない典型に〈写真師〉や〈岩崎〉という男が他方の極に配されている。この枠組みで考えれば、相手の〈喜いちゃん〉は〈私〉の生涯において、時間的には〈楠緒さん〉よりも〈O〉よりも早い時期に属する〈仲の好い友達〉であった。しかし、それにもかかわらず、この二人のあいだに通じあえなかつた経験があったことがクローズアップされている。そこに二節を費やして語られる叙述の眼目がある」(同書、六六六―六六七頁、引用の際字体を常用漢字に改めたところがある)。ま

た、岡氏は直接話法による二人の対話の言葉遣いに着目し、喜いちゃんは「屈折のある物の言い方」をし、〈私〉は「終始ぶつきらばうで直截な言葉遣い」が特徴だとする。氏は漱石の性格形成に多くの紙幅をさくが、喜いちゃんについてはあまり触れていない。喜いちゃんは嘘について本を無断で売ろうとしたのであり、その狡賢さに対する漱石の怒りが、漱石をしてその父親の過去を暴露させたのかもしれない。

- (15) 「憶児時」のテキストについて、筆者は『小説月報』掲載の初出、単行本『縁縁堂随筆』上海開明書店、一九三一年一月初版、同一九三三年六月第三版、一九三四年四月第四版、『縁縁堂随筆』人民文学出版社、一九五七年一月、『縁縁堂随筆』台湾開明書店、一九六八年一〇月二版、『豊子愷文集』第五卷、浙江文艺出版社・浙江教育出版社、一九九二年六月の計七つの版本を見ることができた。書き直しがなされたのは上海開明書店が一九三四年四月第四版を発行した際である。各版の異同について、以下に簡単に述べておく。一九三一年上海開明書店版は初出をほぼそのまま収録するが、語彙の変更が一箇所(齧蝕↓蝕本)、用字の変更が一文字(吃↓喫、誤植が二文字(蟹↓蟹、至味↓滋味)、句読点の脱落が一箇所、増補が一箇所、同じく句読点の誤植が一箇所、文字の削除が二箇所(二文字と文末に付された執筆年記)、新たに補われた文字が一字(誤植か)ある。開明書店第三版は初版を継承するが、第四版において、第三節冒頭の部分が書き直された。一九五七年人民文学出版社版は変動が大きい。語彙の変更、加除は多く、文の削除が四箇所、開明書店第四版に書き直された形を受け継いだ。第二節文末では蟹

を詠った漢詩文を含む一段はすべて削られ、全三節同じく文末に古典詩文を配するという構成が改められたことになる。一九九二年版『豊子愷文集』第五巻は一九五七年人民文学出版社版を踏襲し、變動はわずか一文字の削除にとどまる。一九六八年台湾開明書店版は上海開明書店版第四版以降の紙型をそのまま受け継ぎ、復刻したように見える。なお、筆者は『縁縁堂隨筆』上海開明書店、一九三三年六月第三版を上海図書館で閲覧し、その後偶然豊子愷研究者の呉浩然氏の蔵書にある同書の一九三四年四月第四版を見ることができたため、大幅な書き直しの時期を特定しえた。呉浩然氏のご厚意に感謝する。

(16) 林子青『弘一大師新譜』台湾東大図書公司、一九九三年四月によれば、創作は一九一五年。ここでは『李叔同集』郭長海、郭君兮編、天津人民出版社、二〇〇六年六月、一六八頁による。書き下しは、屋敷信晴氏に斧正をしていただいた。記して、謝意を表す。

(17) 前掲、岡三郎『夏目漱石研究』第二巻、第二部十三「第十九・二十・二十一節の解明」を参照。

(18) 夏目漱石『文学論』『漱石全集』第一四巻、岩波書店、一九九五年八月、三九頁。

(19) 前掲書、四九頁。

(20) 一九二五年一月、豊子愷は『小説月報』第一六巻一一号に美術エッセイ「漫画浅説」を執筆、漫画三コマをも掲載した。一九二七年に入ってから、同誌の一月号と三月号にも芸術隨筆を発表した。

(21) 一九二五年、文学研究会の雑誌『文学週報』が豊子愷の漫画を採用するが、同誌を編集していたのは鄭振鐸であった。掲載後、画

集の出版を勧めたのも彼で、彼は同年末刊行の豊子愷初の画集『子愷漫画』のために序文も書いた。

(22) 豊子愷『縁縁堂統筆』では「王団団」という一節が設けられ、そこで作者は王団団とその家族を詳細に記し、王団団を魯迅「故郷」の閩土に重ね、出生の秘密がその性格をゆがめていったことも追跡している。王団団は大きくなってからその母に暴力を振るっては、すぐにいたわることがあったという。日中戦争後、作者が疎開から帰ってきたとき、王団団はすでになくなり、その家族もどこかへ越していった。最後に作者は、一家の不幸をもたらしたのは、婚姻の自由を許さない儒教だと批判した。『縁縁堂統筆』第十節「中举人（举人試験に合格する）」で、作者はその父の栄光に焦点を当て、第一八節「清明」でもその父の文学に触れ、父との思い出を述べている。「殺生」をテーマとした「憶儿时」第二節で、父の存在の大きさは語りつくせるものではなかった。豊子愷『縁縁堂統筆』『豊子愷文集』第六巻、浙江文芸出版社・浙江教育出版社、一九九二年六月による。

付記・本文には、平成二〇年度日本学術振興会科学研究費補助金による調査旅行の成果が生かされている。図1を入手する際、大野公賀氏にお世話になった。